

# アウトドア科目、前面に生徒の頑張り発信に力

【南富良野】入学者が過去最少の3人まで減った2021年春、南富良野高校に着任した能登啓児校長(57)が今月末、離任する。着任後は町の観光資源でもあるアウトドア科目を前面に打ち出し、生徒が地域で実践的に学ぶ特色ある学校づくりを目指す。入学者は22年度が18人、23年度も14人の予定で回復基調だ。4月からは札幌丘珠高校の校長に転任する能登校長に、試行錯誤の2年間と町立高の未来像などを聞いた。

「どのような思いを持って着任したのですか。」

「1年生が3人という危機的状況で生徒の確保が最重要課題でした。(私が校長になる前から)アウトドア科目を必修にすることは決まっていたんですが、着任するまで具体的な授業内容がほとんど固まっていまじませんでした。『1年で結果を出さなければ』と強いプレッシャーを感じながらのスタートでした」

「着任後1年で生徒数は大幅に回復しました。」

「1年生向けの『アウトドア

## 今月末で離任 南富良野高・能登校長に聞く



「試行錯誤の2年間だった」と話す能登啓児校長

### 「自由な発想忘れないで」

「I」や、カヌー部やカーリング部といった部活動の魅力をコックツと発信したことが実を結んだと思います。最初の半年間は手探りでしたが、徐々に町や学校のことがわかり始めました。授業に協力してくださった町民の方々アイデアや新たなつながりしてくれたのが大きかったです。それらを取り入れていく作業が面白くて、アウトドアが高校の特色になると確信に変わりました」

「アウトドア科目は導入から2年がたちました。」

「現場の教員はもろもろなのですが、21年入学の2年生3人が授業の形を作ってくれました。初年度の人数が少なかつたからこそリスク管理と中身の濃い授業運営の両立を考えやすかつた。何より3人の成長には目を張るものがあります。勘違いされがちですが、アウトドアは遊びではないんです。地域の課題を解決する能力を養うことが授業の到達目標の一つです。生徒に『できない理由を探すのではなく、できる方法を考えよう』と伝えていて、(課題を)

諦めずに粘り強くやり抜く過程は社会に出た後も必ず役立つと思っています」

「2年間で特に重視したことはなんですか。」

「地域に発信することです。コロナ禍で交流がしにくくなり、町民に高校の取り組みが認知されていないと強く感じました。町外から生徒を呼び込むことを意識しがちですが、町内の中学校からも進学してもらいたいことには高校存続は難しいです。交流サイト(SNS)での発信強化や新聞報道などを通じて町民に生徒らの頑張りが伝わるように工夫しました」

「南富良野高校の将来像をどう描きますか。」

「町の文化やスポーツの拠点になり、町民に愛されながら進んでいく高校であってほしいです。イベントや講演会などで高校を会場にして町民が集う場になるイメージです。2年間で教職員と協力してその土台は作れたと思っています。ただ、将来像に正解はないので自由な発想を忘れずにいてほしい。学校を離れますが、今後の歩みを応援していきたいです」

(聞き手・相武大輝)

令和5年(2023年)3月29日

北海道新聞朝刊